

令和4年（2022年）10月12日
熊本県教育庁教育総務局文化課

令和4年度「熊本県近代文化功労者」の決定について

県教育委員会において、本年度の熊本県近代文化功労者を下記3名（現存者2名・故人1名）に決定しました。

また、顕彰式を11月21日（月）に県庁行政棟本館5階知事応接室にて行います。

記

1 顕彰者

○石原^{いしはら}昌^{しょういち}一 氏（芸術） 昭和16年（1941年）生（満81歳）
熊本を代表する彫刻家として、JR熊本駅前の「おてもやん」像、熊本市高橋公園の「横井小楠と維新群像」など、熊本の歴史と文化を象徴する作品を数多く制作し、芸術的景観の醸成に大きく貢献した。また、目の不自由な方々が造形物を鑑賞する「手でみる造型展」に長年にわたり携わり、社会的意義の大きい美術展を発展させた。

○満屋^{みつや}裕^{ひろ}明 氏（学術） 昭和25年（1950年）生（満72歳）
エイズウイルス研究の世界的権威。かつて「死の病」と恐れられたエイズの治療薬研究に着手し、世界初のエイズ治療薬「AZT（アジトチミジン）」を開発した。その後も「ddI（ジダノシン）」、「ddC（ザルシタビン）」、「ダルナビル」と相次いでエイズ治療薬を開発した。「ダルナビル」は、途上国が特許料を払わずに使える医薬品として世界で初めて国連に登録され、世界中のエイズ感染者治療に大きく貢献することとなった。

○狩野^{かの}瑠^{しゅう}鵬 氏（芸術） 故人 平成28年（2016年）没（享年79歳）
熊本を代表する喜多流能楽師として、熊本及び海外での能楽普及に多大な業績を残した。能楽研究団体「三ツの木の家」を設立し熊本の人々への普及活動に取り組むとともに、フランス、ドイツ、カンボジア等への能楽公演指導を重ね交流を深めた。特に仏エクスアンプロバンス市に能楽堂を寄贈し、熊本市との国際交流に大きく貢献した。

2 顕彰式

日時：令和4年（2022年）11月21日（月）11時～11時45分

会場：熊本県庁行政棟本館5階 知事応接室

（参考）熊本県近代文化功労者の顕彰について

昭和23年度の第1回から本年度で72回目を迎える。本県出身者又は在住者（故人を含む）で、教育・学術・芸術・宗教・産業等あらゆる分野で近代文化の発展に貢献し、その功績が顕著である方を顕彰しており、これまでの顕彰者の累計は今回の3名を含めて305名に及ぶ。

<問い合わせ先>

熊本県教育庁教育総務局文化課

齊藤（内線6714）

園川（内線6720）

TEL 096-333-2704 FAX 096-384-7220



いしはら しょういち
石原 昌一（芸術）

昭和16年（1941年）5月21日生
（満81歳）

【写真は本人提供】

石原氏は埼玉県川口市で生まれる。東京教育大学教育学部芸術学科を卒業後、東京都立足立聾学校美術教諭を経て、熊本大学教育学部に講師として着任。教育学部助教授、教授、教育学部長を歴任し、平成19年熊本大学を退官した。退官後は、平成24年まで崇城大学芸術学部美術科教授を務めた。

氏は、熊本大学教育学部で研究・教育に精励すると同時に、塑像制作に取り組んだ。その作品は、昭和48年第3回日本彫刻会展覧会初出品初入選以降、昭和59年第16回日展及び昭和60年第17回日展特選、平成6年第70回白日会展吉田賞受賞など、日本を代表する展覧会で高い評価を受けてきた。これらの実績から日展審査委員、日展評議員、更に改組・新日展審査委員を歴任し、現在名誉会員となっている。

氏が制作した彫像はその優れた芸術性から、県内各地に設置されている。具体的には、JR熊本駅前の「おてもやん」像、熊本市高橋公園の「横井小楠と維新群像」、牛深港の「ハイヤ像」、錦町の「丸目蔵人佐及び少年剣士像」、熊本大学の「小泉八雲」像、鞠智城跡の「温故創生之碑」など数多く、その作品は熊本の芸術的景観の醸成に大きく貢献している。また、2019年の世界女子ハンドボール熊本大会の優勝トロフィー制作など、その優れた造形力は彫塑界を超えた幅広い分野で発揮されている。

氏は大学美術教育の運営に関与するとともに、そのリーダーシップで熊本県美術協会会長、熊本県美術家連盟会長を務め、長く熊本の美術界を牽引してきた。更に熊本県文化協会においても目の不自由な人が造形物を鑑賞することを可能にする「手でみる造型展」の運営に実行委員長として携わり、全国的にも社会的意義の大きな美術展を長年にわたり継続・発展させてきた。

これらの功績から、平成28年に地域文化功労者文部科学大臣賞を受賞、さらに令和2年には瑞宝中綬章（教育研究功労）を受章。また、熊本県文化懇話会賞、くまもと県民文化賞などを受賞した。

昭和50年10月～昭和60年3月	熊本大学教育学部助教授
昭和60年 4月～平成19年3月	熊本大学教育学部教授
平成19年3月	熊本大学定年退官、同大学名誉教授
平成20年～平成23年	熊本県文化協会副会長
平成22年～平成25年	熊本県美術協会会長
平成25年～平成26年、平成28年～令和3年	熊本県美術家連盟会長



みつや ひろあき
満屋 裕明（学術）

昭和25年（1950年）8月9日 生
（満72歳）

【写真は本人提供】

満屋氏は長崎県佐世保市で生まれる。熊本大学医学部医学科を卒業後、熊本大学医学部内科学講座第二助手となる。昭和57年アメリカに留学、米国国立癌研究所客員研究員、特別研究員、主任研究員を経て、米国国立癌研究所レトロウイルス感染症部内科療法部門部長となる。平成9年から平成28年まで熊本大学内科学第二講座教授を兼務。また平成24年から国立国際医療研究センター臨床研究センター長、研究所所長を歴任。併せて、平成28年より熊本大学特別招聘教授、熊本大学名誉教授、平成29年より千葉大学客員教授、獨協医科大学特別栄誉教授を務める。

成人T細胞白血病の研究を行っていた満屋氏は、渡米後白血病と同様の免疫細胞（ヒトCD4陽性T細胞）に感染するエイズウイルス（ヒト免疫不全ウイルス）の研究を始めた。氏は、その標的細胞を用いて、抗ウイルス活性の評価方法を確認し、エイズ治療薬AZT（アジドチミジン）の開発に成功した。AZTは昭和62年に世界で最初のエイズ治療薬として認可された。その後、満屋氏により世界で2番目の治療薬ddI（ジダノシン）、3番目の治療薬ddC（ザルシタビン）も開発された。また、満屋氏が4番目に開発した治療薬ダルナビルは、途上国が特許料を払わずに使える医薬品として世界で初めて国連に登録された。その結果、満屋氏が開発した薬は世界中で提供され、エイズ治療に大きく貢献することとなった。

満屋氏の最も重要な業績の1つはレトロウイルス感染症に対して化学療法が可能であることを初めて示した点にある。満屋氏の研究成果に触発され、多くの新規抗ウイルス薬が開発された。その結果、かつて「死の病」であったエイズは「コントロール可能な慢性感染症」へと変貌し、世界の多くの感染者の命が救われた。満屋氏は現在も先導的な研究を行い、B型肝炎ウイルスや新型コロナウイルスの治療薬開発にも貢献を続けている。

これらの功績から、紫綬褒章、慶応医学賞、読売賞、朝日賞、日本学士院賞、熊日賞、米国国立癌研究所所長賞など多数の賞を受賞している。

平成3年～現在	米国国立癌研究所レトロウイルス感染症部内科療法部門部長
平成9年～平成28年	熊本大学医学部内科学第二講座教授
平成24年～平成28年	国立国際医療研究センター臨床研究センター長
平成28年～現在	国立国際医療研究センター研究所所長
平成28年～現在	熊本大学特別招聘教授、熊本大学名誉教授
平成29年～現在	千葉大学客員教授、獨協医科大学特別栄誉教授



【写真は遺族提供】

かの しゅうほう
狩野 琇鵬（芸術） 故人

昭和12年（1937年）1月 2日 生

平成28年（2016年）7月24日 没

（享年79歳）

狩野氏は熊本市で生まれる。中学入学と同時に、友枝家に入門。県立第一高等学校卒業後、東京の喜多流宗家に内弟子に入り修業に励んだ。昭和37年、15世喜多流宗家の下で、喜多流職分・能楽協会会員となった。昭和61年には、重要無形文化財保持者に認定された。

氏は、昭和41年喜多流の塩津哲生氏とともに能楽研究団体「三ツの木の家」を設立し、若者を始めとした熊本の人々への能楽普及に尽力した。また「能どころ」といわれる熊本で、県内の小中学校を回り、能の体験教室を開催した。他にも能の普及活動を通じて、社会貢献にも取り組んだ。健軍神社で毎年行われる「花の薪能」は、雲仙・普賢岳噴火の被災者支援で始められ、その後ユニセフの活動に協賛し、アフリカの子供たちの支援等に役立てられている。

一方能楽の海外普及にも力を尽くし、多数の実績をあげた。その活動はフランス、ドイツ、ポーランド、アメリカからカンボジア、ベトナム等アジア地区にも広がり、国際交流に大いに貢献した。特にフランス・エクサンプロバンス市にはヨーロッパで唯一の本格能楽堂を自費で寄贈した。平成6年に柿落とし能公演を行い、以降ほぼ毎年公演指導を重ね交流を深めた。そのことがきっかけとなり、平成25年には熊本市とエクサンプロバンス市で交流都市協定が締結された。

一方、新作の発表にも力を注ぎ、熊本城築城400年記念の創作「熊本能—清正—」、フランス初演の「ジャンヌダルク」、他にも「五輪書—武蔵伝」などのオリジナル作品を発表し、能楽の芸術としての発展にも力を注いだ。

これらの功績から、くまもと県民文化賞、地域文化功労者表彰、熊本県文化懇話会賞、国際ソロプチミスト千嘉代子賞、熊日賞、仏芸術文化勲章コマンドールなど多数の賞を受賞している。

- | | |
|-------|----------------------------|
| 昭和33年 | 喜多流宗家（東京）に入門 |
| 昭和37年 | 喜多流職分・能楽協会会員となる |
| 昭和61年 | 重要無形文化財「能楽」の保持者認定 |
| 平成5年 | 仏エクサンプロバンス市へ能舞台を寄贈 |
| 平成20年 | 熊本城築城400年記念 新作能「熊本能—清正—」発表 |
| 平成24年 | 新作能「ジャンヌダルク」発表 |